

# *The Mill on the Floss* と *Jane Eyre* — 二つの自伝的教養小説を巡って

池 園 宏

George Eliot と Charlotte Brontë が執筆した作品の中で、*The Mill on the Floss* (以下 *MF*) と *Jane Eyre* (以下 *JE*) は互いに類似する点が見受けられる。まず初めに以下の一節を見てみよう。

Not a human being that ever lived could wish to be loved better than I was loved; and him who thus loved me I absolutely worshipped: and I must renounce love and idol. One drear word comprised my intolerable duty — “Depart!”<sup>1</sup>

仮に出典を伏せてこの箇所だけを読めば、読み手はこれがまるで *MF* からの引用であるかのような錯覚を受けるのではないだろうか。「愛し愛されたい欲求」、そして愛の対象を「放棄」という「義務」は、まさに主人公 Maggie Tulliver の属性を表すキーワード群だと言える。だが、実のところこの引用は、*JE* の主人公 Jane Eyre が愛する Edward Rochester から重大な過去の秘密を暴露されて衝撃を受け、内的葛藤に苦しむ場面の独白である。Maggie も心惹かれる異性との関係を巡って精神的ジレンマに陥るが、この例が示すように、両主人公の言動や描写の仕方にはよく似た部分が見受けられる。

両作品をさらに包括的視点から捉えれば、いずれも作者の精神的自叙伝の要素を含み、情熱と反抗心が融合した女性主人公の成長過程を教養小説のスタイルで活写しているところが、その類似点として挙げられるだろう。Jerome Hamilton Buckley は教養小説の定義について以下のように述べている。

[No novel] that ignores more than two or three of its principal elements — childhood, the conflict of generations, provinciality, the

larger society, self-education, alienation, ordeal by love, the search for a vocation and a working philosophy — answers the requirements of the Bildungsroman . . . .<sup>2</sup>

このうち「子供時代」「より広大な社会」「自己教育」「疎外」「愛による試練」などの諸特性は、まさに両作品ともに当てはまる重要な要素である。Maggie と Jane は各々の形でこれらを経験しつつ、苦難に満ちた人生を歩む。一方、これとは逆に、二つの作品には当然のことながら様々な相違点が存在し、それらは際立ったコントラストを見せる。とりわけ顕著なのは、各主人公が複数の異性パートナーの選択を巡って対照的とも言える人生の軌道を辿り、それが最終的に物語結末のあり方の違いにも結びつく形となっている点である。このことは、両小説家の持つ道徳的主張点や芸術的方向性の差異を反映したものだと考えられる。小論では、類似点と相違点が様々に交錯する両作品の分析を通して、そこから浮き彫りとなる両作家の特質の一端を考察してみたい。

MF の Maggie が人生において重大な選択をする際のキーワードは、「自己放棄」あるいは「自己犠牲」という概念である。Eliot は、自身が若い頃に読んだ Thomas à Kempis の書 *The Imitation of Christ* を小説中に登場させ、その自己放棄の思想を Maggie の人生に具現化させている。Eliot はこの思想を“moral heroism”<sup>3</sup>と呼んでいるが、自己放棄に基づく自己犠牲の精神は彼女の道徳的思想の重要な一面を成している。彼女は1848年に *JE* を読んだ際、主人公 Jane が Rochester のもとを去る決断をした箇所に対して違和感を覚えている。着目したいのは、この作品に対する批判的な感想を記した手紙を友人 Charles Bray 宛に書き送った際に、彼女が「自己犠牲」という言葉を用いている点である。

I have read *Jane Eyre*, mon ami, and shall be glad to know what you admire in it. All self-sacrifice is good — but one would like it to be in a somewhat nobler cause than that of a diabolical law which chains a man soul and body to a putrefying carcass.<sup>4</sup>

最後の「腐敗している死体」とは、Rochester の妻の狂女 Bertha を指している。Eliot は、合法的かつ形式的な結婚という既成の制度に拘泥し、自己

の愛情を犠牲にした Jane の姿勢を批判しているわけである。これに関しては、後に妻子ある George Henry Lewes との同棲関係に踏み切った Eliot 自身の未来を予見したような言説であるとか、MF をそうした伝記的事実に対する自己弁明の作品だと指摘する批評家もいる。<sup>5</sup>しかし小論では、そのような伝記的事実との関連性を認めつつも、議論の焦点は主としてテキストから抽出されうる部分に向けてみたい。

Jane の選択に対して Eliot の用いた「自己犠牲」という言葉は果たして適切なものだろうか。この点に関して Elaine Showalter は、Jane を「自己達成のヒロイン」(the heroine of fulfillment)、Maggie を「自己放棄のヒロイン」(the heroine of renunciation) と位置づけた上で、Eliot には「自己犠牲」(self-sacrifice) と「自己主張」(self-assertion) の違いが理解できなかったのだと主張している。<sup>6</sup>この考え方は明解ではあるが、さらに一步進めて考察する余地があるように思われる。Showalter の主張の根拠となっているのは、Jane が Rochester に別れを告げる際の、“I care for myself. The more solitary, the more friendless, the more unsustained I am, the more I will respect myself” (JE 344) という言葉である。この有名な台詞で着目すべきは、「私」という語の反復、そして愛する対象を放棄する決意の根底にある「自己」への固執や尊重の姿勢である。この意味で彼女が自己主張、自己達成のヒロインであるという解釈は、なるほど妥当なものだと言えるだろう。Barbara Prentis は、この「私」の重視が Charlotte のみならず Brontë 姉妹に共通する性質であることを指摘する。

For them [the Brontës], “relationship” meant for the most part the “I” — that is to say, the first person singular — sharply focused against a background of “others,” most of whom formed a group that was similarly *unordinary* by virtue of being predominantly hostile.<sup>7</sup>

Charlotte は Jane に、自己の尊厳を脅かす周囲の異質な他者と相対する関係の中で、自我意識を前面に押し出し、それを優先する生き方をさせているというわけである。ただし、このことはもちろん、Jane が Maggie より利己的、主観的であるとか、ましてや性質的に劣っているというような単純な図式に結びつくのでないことは言うまでもない。Jane の別の側面である、他者への「奉仕」(Servitude) (JE 118) に対する強い憧れは、そのことを何より物語るものであろう。また、Jane がついにソーンフィールド屋敷を去ろう

とする場面での心境は、自己に対する彼女の意識が決して一面的でないことを示している。

What was I? In the midst of my pain of heart and frantic effort of principle, I abhorred myself. I had no solace from self-approbation: none even from self-respect. I had injured — wounded — left my master. I was hateful in my own eyes. (*JE* 348)

この言葉が、先の引用「私は私自身が大事だ。孤独であればあるほど、友人もなく庇護もなければいけぬほど、私はますます自分自身を尊重するのだ」とほぼ対になった書き方となっていることに着目したい。ここに見られるのは、自己主張を達成する過程で他者を傷つけたことへの後悔、そしてそこから生じる自己嫌悪の念である。こうなると、先の引用箇所のみをもとに、Janeを自己達成のヒロインだと一面的に判断することは難しくなる。この選択の場面で自己達成を実現させるためには、文字通り自己を捨てる必要があるわけだ。その意味では、確かにJaneの行為を「自己犠牲」だと批判したEliotの主張は的外れではないということになるだろう。しかし、それは法制度的な問題のみではなく、後で考察するMaggieと同じように、自己と他者との精神的葛藤の末に生じる自己犠牲だということを踏まえておくべきだと思われる。ただし、Janeの場合、このような葛藤に苛まれながらも、“Still I could not turn, nor retrace one step” (*JE* 348) と、やはりソーンフィールドを去る決意は揺るがない。Janeの生き方は、自己主張や自己達成を基盤としながらも、同時に自己放棄や自己犠牲の精神を伴い、両者のせめぎあいの中で、究極的にはあえて自己尊重の考えに立ち戻り、自己に固執するものと言えよう。Charlotteが描いたのは、自己犠牲を払いながらも自己達成を成し遂げていくヒロイン像である。

それでは次に、Maggieの自己犠牲や自己放棄について考えてみよう。着目したいのは、彼女が人生の最良の手段として選択した自己放棄が、その初期の段階では賞賛に値するものではなく、語り手（＝この場合は作者Eliotと同じ）によって客観的かつ皮肉なコメントが加えられている点である。

She had not perceived — how could she until she had lived longer? — the inmost truth of the old monk’s outpourings, that renunciation remains sorrow, though a sorrow borne willingly. Maggie was still

panting for happiness, and was in ecstasy because she had found the key to it.<sup>8</sup>

Maggie が Thomas à Kempis の書物に感化されたのは、家族が没落の憂き目に会い、周囲に希望を見出せない絶望的な心理状態に陥っていた時である。この時点での彼女の自己放棄は、苦境からの逃避願望を伴う未熟で衝動的なものである。自己陶酔的、自己保存的とも言えるその姿勢には、Eliot が全ての作品において批判的とするエゴイズムの芽が潜んでいる。Maggie の頑迷な姿勢に対して“narrow asceticism” (MF 402) だと非難する Philip Wakem は、作者の代弁者の役割を担っていると言えるだろう。Eliot の提唱する自己放棄のレベルに至るにはさらに試練の段階を踏む必要があり、それが達成されるのは物語後半の第6部14章、“Waking”「目覚めて」というタイトルの章においてである。場面は、Stephen Guest に誘惑されて乗ったボートがフロス河下流まで流されてしまい、一夜明かして目覚めた後に訪れる文字通りの覚醒シーンである。

Philip had been right when he told her that she knew nothing of renunciation: she had thought it was quiet ecstasy; she saw it face to face now — that sad patient living strength which holds the clue of life, and saw that the thorns were for ever pressing on its brow. (MF 597)

先の引用箇所と比較すればよく分かるが、Maggie は自己陶酔的な自己放棄から、悲しみを伴うそれへと精神的発展を遂げている。この悲しみを伴う人間的成長は、同じく作者の自己投影的ヒロインである *Middlemarch* の Dorothea Brooke も経験するもので、<sup>9</sup> Eliot がしばしば用いる重要なモチーフである。この覚醒場面の後に Maggie は Stephen に別れを告げるわけだが、その決意の根底にあるのは、他者の存在に対する鋭敏な意識である。

... there are things we must renounce in life — some of us must resign love. Many things are difficult and dark to me — but I see one thing quite clearly — that I must not, cannot seek my own happiness by sacrificing others. (MF 571)

これは、Eliot が好んで用いる言葉を使えば、他者への「共感」(sympathy)に通じる考え方である。先に述べたエゴイズムの問題には常に他者性の問題が付随しており、Maggie の自己放棄の拠り所は、Eliot が全作品において提唱する他者との絆にある。このように自己中心的な自己放棄から利他的な自己放棄へ進展したという意味では、Maggie の性質は Showalter の言うような “self-destructive”<sup>10</sup>なものではなく、むしろ彼女は Jane と同じように自己達成を遂げたのだと言えるのではないだろうか。Maggie の精神的成長には様々な意味が含まれるが、その重要な一つの要素が自己犠牲の観念の深化だと言えるだろう。Maggie にとって、そして Eliot にとって、自己放棄は選択の放棄ではなく、重要な道徳的選択の一つなのだ。Jane とは性質こそ異なるが、同じように自己達成へと向かう過程で、Eliot があえて自己放棄を選択するヒロインを描いた点は、彼女の利他主義 (altruism) 的道徳思想を強く反映していて、非常に興味深い部分である。

ここまで両主人公の自己犠牲と自己達成に関わる議論を進めてきたが、重要なのはもちろん両者の優劣の度合いではなく、その対照性によって見えてくるものである。これまで見てきたように、自己犠牲にせよ自己達成にせよ共通する要素は「自己」や「自我」の概念であるが、この問題をさらに別の角度から掘り下げて考えてみることにしよう。着目したいのは、自己のアイデンティティを形成、規定するものとしての、Maggie と Jane の時間認識と空間認識のあり方である。両作品では、時空間に対する主人公の姿勢、そしてその背後にある作者の思想が顕著に表れ出ており、それが自己の問題、ひいては自己犠牲や自己達成を巡る作品の方向性に大きく反映されている。以降の議論では、自己規定のあり方を決定づける時空間認識の問題について、これまでの議論を踏まえつつ考察していきたい。

時空間認識に関わる重要な要素として、Eliot の作品では “rootedness” (根ざしていること) という概念がしばしば登場する。MF においては “deep immovable roots in memory” (MF 222) という表現が用いられているが、例えば後期作品の *Daniel Deronda* においても同じ主旨の表現が見受けられる。<sup>11</sup> Eliot が歴史的時間とりわけ過去の概念を重視し、MF でもその意義が繰り返し問われていることは、Thomas Pinney など様々な批評家によって指摘されてきた。<sup>12</sup> そして、Maggie が Stephen に対して “If the past is not to bind us, where can duty lie?” (MF 601-02) と抗議するとき、彼女にとっての過去は他者との絆と同一化される。彼女が自己放棄を決意して Stephen

に別れを告げるのは、いとこの Lucy Deane、幼馴染みの Philip、そして何より敬愛する兄 Tom との過去の絆を重視するが故である。さらに、兄妹が抱き合って溺死する物語結末の場面は、Maggie の過去観の悲劇的集大成であり、それは逆説的に彼女の自己達成の到達点でもある。この時間認識のあり方は空間認識のそれとも密接に結びついている。過去の絆が培われた特定の空間に根ざしていることを重視するが故に、Maggie は場を移動せず、たとえ移動しても元の場に回帰するという行動パターンを繰り返す。Stephen とともにフロス河を流された際、その流れに逆らって故郷の土地へと戻るのはその最たる例である。このパターンは既に、家出をしてジプシーのもとへ行こうと試みるものの、志半ばで挫折し、結局は懐かしい父のいる我が家へ戻るといふ幼少期のエピソードに予兆的に描かれている。

一方、*MF* との対比で気づかされるのは、*JE* においては Eliot の言うような “rootedness” という概念は希薄だという事実である。特定の時空間に留まらない、あるいは留まることを拒否する傾向を示すのが Jane の特徴の一つだと言える。それは例えば、Rochester との別れを申し出る際の彼女の言葉に明確に表れている。

I cleared and steadied my voice to reply: “All is changed about me, sir; I must change, too — there is no doubt of that; and to avoid fluctuations of feeling, and continual combats with recollections and associations, there is only one way — Adèle must have a new governess, sir.” (*JE* 327-28)

ここに示されているのは、過去の「記憶や連想」を振り払おうとする Jane の意志である。自己達成のために過去から目を背けるという論理は理解できなくもないが、Maggie に比べて、Jane がそのこだわりを捨て去ることにそれほど躊躇しないでいられるのは何故だろうか。そのヒントは、Jane を説得する際の Rochester の以下の言葉と、それに対する彼女の反応にあるように思われる。

Is it better to drive a fellow-creature to despair than to transgress a mere human law, no man being injured by the breach? — for you have neither relatives nor acquaintances whom you need fear to offend by living with me. (*JE* 343)



Rochester の論理は、Jane が留まることによって傷つく血縁者や身寄りはいないのだから、二人が別れるの必要性はないというものである。ところが、その指摘を受けた Jane は “Who in the world cares for *you*? or who will be injured by what you do?” (JE 344) と同じ疑問を自らに投げかけた末に、先の引用の「私は私自身が大事だ」という主張へと至るのだ。もちろん、Jane の決意の背景には二重結婚の持つ法的、道義的罪の問題があるが、ここでは二人の対話の流れがより重要だと考えられる。つまり、血縁者や身寄りが誰もいないという事実の再認識が、強烈な自我意識と自立心を覚醒させ、Rochester との今までの関係を断つ決意を誘発する引き金となっていると解釈できるわけだ。

ここで作者が設けた孤児という設定が改めてクローズアップされてくる。そもそも Jane の物語は、肉親の絆という過去のルーツを断ち切られたところから始まるヒロインの物語である。Charles Dickens の *David Copperfield* や *Great Expectations* など、この時代の教養小説の主人公には、孤児に生まれたり孤児と化したりする設定がなされているものが多く見受けられるが、Charlotte が同様の設定をしたことにも重要な意味があるわけだ。彼女の小説の特徴として、Terry Eagleton は、血縁の絆が欠如していたり、それを断ち切ってしまう主人公像の存在を指摘する。

At the centre of all Charlotte's novels . . . is a figure who either lacks or deliberately cuts the bonds of kinship. This leaves the self a free, blank, “pre-social” atom: free to be injured and exploited, but free also to progress, move through the class-structure, choose and forge relationships, strenuously utilise its talents in scorn of autocracy or paternalism.<sup>13</sup>

Charlotte の他作品の主人公、*The Professor* の William Crimsworth や *Villette* の Lucy Snowe も同様の傾向を持つが、Jane もまさにこの指摘に合致する人物像である。彼女は親族にあたる Reed 家を離れた後、一度だけ彼らのゲイツヘッド邸を再訪問する機会が与えられるが、結果的にはそれが彼らとの生涯の別れへと結びついている。上記の観点から考えれば、この再訪問は血縁者との絶縁につながるエピソード、あるいは、“I shall not have occasion to refer either to her [Eliza] or her sister again” (JE 270) という Jane の発言が示すように、彼女が絶縁宣言をするために意図的に挿入されたエビ



ソードだと読むことができる。このように、Jane が自己達成に至るためには、過去の間人関係を断ち切ることが必然的に要求されていて、それを後押しするために孤児という設定が有効に機能しているのだと言える。孤児はもともと歳月に培われた愛情の絆が稀薄であるが故に、自己に意識を向けざるをえない存在なのである。

この点は Eliot の創造する人物との決定的な違いが表れている部分である。Eliot も出自の問題をプロット上に持ち込むことはあるが、周囲の血縁関係から孤立した主要人物を描くことはしない。*Adam Bede* の Hetty Sorrel や *Middlemarch* の Dorothea も両親は不在だが、それを補う血縁者の存在が設定されており、かつその繋がりが断ち切られたところでプロットが成立する描き方はなされていない。また、*Daniel Deronda* の Deronda も、長年関係が断たれていた実の母親の出現が、彼のユダヤ人としての新たなアイデンティティ形成を強く後押しする。MF に関して付け加えれば、小説中における Tulliver 家と Dodson 家の詳細な描写は、Maggie という個人が、単独ではなく、家系の歴史の中に厳然と位置づけられ認識されるべきだという作者の思想の表れである。もちろん、Eliot は過去にのみ拘泥しているわけではない。彼女は確かに過去を重視はするが、Maggie の “I desire no future that will break the ties of the past” (MF 564) という言葉に示されるように、それは過去から現在、未来へと続く有機的連続性や因果関係を尊重するからに他ならない。この思想は彼女の小説や評論の中に多々見出すことができる。これに対して Charlotte の小説では、Eliot ほど時の連続性や因果律に固執しない特徴が見受けられる。この点に関連して、David Cecil は以下のように述べている。

Her moods know no idle relaxed intervals, no impartial meditation on what has passed, no calm consideration of the future. Indeed, concentrated as she is on her immediate reactions, she has no sense of past or future, of the huge continuous process of time that conditions human existence, modifying impressions, indifferently ordering events in significance and perspective.<sup>14</sup>

Charlotte は過去から未来へと持続する時間の経緯よりもむしろ現在に傾注するというこの指摘は、確かに彼女の小説の一面を言い表わしていると言える。同時に、主語を入れ替え、否定文を肯定文に変えれば、そのまま Eliot

の小説の特徴と読み替えることもできる。もっとも、Charlotte が未来を考慮していないという Cecil の考えは修正が必要で、*JE* の主人公の場合はむしろ未来を志向する姿勢が見て取れると言えるだろう。自己達成のヒロインという観点から言えば、自分の未来の人生のために、あえて過去を放棄するだけの自我の強靱さというものに重きが置かれているのだと考えられる。Maggie も同じく強烈な自我の持ち主だが、未来へ進もうとすればするほど過去に立ち返って自己確認を行うのが彼女の性質であり、またそれが Eliot の重視する倫理的姿勢なのである。

*JE* の空間的側面はどう描かれているだろうか。時間的束縛から解放される Jane は、必然的に空間的束縛からも解放される。Eagleton の引用にあった「自由に前進する」という指摘は、空間移動に関する Jane の性質もまた示唆している。この物語は Jane が5つの場所を順に移動しながら成長するという基本構造を持つ。このため、John Bunyan の *The Pilgrim's Progress* に準えて、“Jane's Progress” と称されることもある。見逃してはならないのは、彼女がかつて滞在した場には回帰しないというパターンである。たとえ回帰したとしても、ゲイツヘッド再訪問の例に明らかなように、それはその場との決定的な決別という結果を伴う。ゲイツヘッドは Jane の最初の住処だが、血縁による愛情を断たれたその空間、とりわけ「赤い部屋」に幽閉された恐怖の原体験は、閉所恐怖症的トラウマとなって、特定の空間に留まりえない彼女の傾向を誘発しているとも解釈できるのではないだろうか。これは肉親への愛情に培われた Maggie の空間的執着とは対照的である。また、Rochester の住居であるソーンフィールドは Jane の安住の場となるはずだったが、屋根裏に閉じ込められた Jane の「分身」<sup>15</sup> としての狂女 Bertha がそれを阻害するのは皮肉な事実である。さらに、様々な批評と批判的的となってきた、Rochester の “Janel Janel Janel!” (*JE* 444) という声を Jane がテレパシーのように聞き取り、St John Rivers の元を去るというエピソードも、本論の視点から考えれば、彼女の場の移動を可能にさせるためのプロット上の仕掛け、装置であるという解釈も成り立ちうる。そして、その声に導かれて戻ったソーンフィールドは焼失していて機能せず、Jane はまた新たな土地ファーンディーンへの移動を余儀なくされる。これもまた同様のパターンの繰り返しであり、作者による意図的な空間移動の操作だと言えるだろう。このように Jane は空間的にも前進し続ける主人公であり、それは過去という時間を断ち切る性質と表裏一体を成しているのである。

上記の Rochester の声に関しては、実は *MF* の中にもよく似た箇所、意外

な接点がある点は見逃されがちである。この問題を最後に検証してみることにしよう。その箇所とは、Maggie が別れた Stephen からよりを戻したいと懇願する手紙をもらう場面である。Maggie は彼とのスキャンダルによって家にいられなくなり、牧師の Dr Kenn から故郷を離れるよう助言されている。手紙が届くのは、周囲からの非難が堪え難いものとなり、ついにその助言を受け入れようかと考え直した時点のことである。手紙を読んだ Maggie は “real temptation” (MF 647) が始まったとを感じるのだが、これは一度決別した愛の対象からの再度の誘惑という意味で、Jane が Rochester の声を聞いたときとオーバーラップする場面だと言えるだろう。注目したいのは、*JE* と同様に、*MF* においても Maggie には相手の「声」が聞こえた描写されている点である— “She did not *read* the letter: she heard him uttering it, and the voice shook her with its old strange power.” (MF 647-48) ところが、Rochester の声によって St John のいるマーシュ・エンドを離れ、ソーンフィールドへ戻ろうとした Jane とは対照的に、Maggie は苦しみながらも Stephen の声の誘惑を克服し、彼の待つマッドポートへは赴かない決意をする。Rochester の声のエピソードが Jane の空間移動を引き出す装置だとすれば、Stephen の声は過去に根づいた空間に留まろうとする Maggie の性質を浮き彫りにしている。この場面で Maggie は自己放棄の最終的な認識に至るが、以下のように、それは時空間に留まる行為と自己犠牲行為の両者が一致を見る瞬間だと言える。

It [the light] came with the memories that no passion could long quench: the long past came back to her and with it the fountains of self-renouncing pity and affection, of faithfulness and resolve. (MF 648)

この直後に Maggie は洪水の到来に気づくが、その際 “the vision of the old home” (MF 651)、すなわち「過去の空間」を思い浮かべた彼女は、そのビジョンと重なり合う兄 Tom を探し出し、懐かしいかつての我が家である水車場で彼との和解を果たす。この大団円のシーンには、今まで議論してきた Maggie の時空間に対する反応、そして自己犠牲と自己達成の瞬間が同時に凝縮されていると解釈できるのだ。

以上、自己犠牲の意味の問題を足がかりとし、Maggie と Jane の自我の

問題に焦点を当てて考察してきた。両者は単純に自己犠牲や自己達成というレッテルには収まりきれないキャラクターである。どちらの場合も自己犠牲と自己達成が表裏一体を成した形で表れてくるが、あえて対照的な表現の仕方をするならば、Janeはその深層に自己犠牲を内包する自己達成のヒロイン、Maggieはその深層に自己達成を内包する自己犠牲のヒロインと言えるだろう。この差異の背景には、これまで議論してきたような両者の時空間認識の相違、またそれらが複雑に影響しあって成立する自己規定、自己認識の相違が反映されている。MFとJEは、ともに自伝的教養小説という枠組みの中で、作者自らが自己と向き合い、自己を投影、内在化した作品である。その結果、両者の道德観や人生観、芸術観がテキスト内部から直接間接的に表出し、各々の特徴と対照性が興味深く観察されうる作品となっているのだ。

## 注

本稿は日本英文学会九州支部第62回大会シンポジウム「George Eliot と同時代の文人たち」（2009年10月24日、宮崎大学）において口頭発表した原稿に加筆修正を加えたものである。

1. Charlotte Brontë, *Jane Eyre* (1847; Harmondsworth: Penguin, 1985) 342. 以下の引用は全てこの版に拠り、本文中に作品名と頁数を記載する。
2. Jerome Hamilton Buckley, *Season of Youth: The Bildungsroman from Dickens to Golding* (Cambridge: Harvard UP, 1974) 18.
3. George Eliot, “*Westward Ho! and Constance Herbert*,” *Essays of George Eliot*, ed. Thomas Pinney (London: Routledge and Kegan Paul, 1963) 134.
4. Gordon S. Haight, ed., *The George Eliot Letters*, vol. 1 (New Haven: Yale UP, 1954) 268.
5. Barbara Hardy, “*The Mill on the Floss*,” *Critical Essays on George Eliot*, ed. Barbara Hardy (London: Routledge and Kegan Paul, 1970) 51.
6. Elaine Showalter, *A Literature of Their Own: From Charlotte Brontë to Doris Lessing* (1977; London; Virago, 2008) 112, 124.
7. Barbara Prentis, *The Brontë Sisters and George Eliot: A Unity of Difference* (London: Macmillan, 1988) 172.
8. George Eliot, *The Mill on the Floss* (1860; Harmondsworth: Penguin,

- 1988) 384. 以下の引用は全てこの版に拠り、本文中に作品名と頁数を記載する。
9. Dorothea の悲しみを伴う人間的成長は、以下の箇所に明確に表れている。“... but she had waked to a new condition: she felt as if her soul had been liberated from its terrible conflict; she was no longer wrestling with her grief, but could sit down with it as a lasting companion and make it a sharer in her thoughts.” George Eliot, *Middlemarch* (1871-72; Harmondsworth: Penguin, 1985) 845.
  10. Showalter 112.
  11. Eliot は *Daniel Deronda* において、“rootedness” の重要性を以下のように表現している。“A human life, I think, should be well rooted in some spot of a native land, where it may get the love of tender kinship for the face of the earth, for the labours men go forth to, for the sounds and accents that haunt it, for whatever will give that early home a familiar unmistakable difference amidst the future widening of knowledge: a spot where the definiteness of early memories may be inwrought with affection, and kindly acquaintance with all neighbours, even to the dogs and donkeys, may spread not by sentimental effort and reflection, but as a sweet habit of the blood.” George Eliot, *Daniel Deronda* (1876; Harmondsworth: Penguin, 1995) 22.
  12. Thomas Pinney, “The Authority of the Past in George Eliot’s Novels,” *George Eliot: A Collection of Critical Essays*, ed. George R. Creeger (Englewood Cliffs: Prentice-Hall, 1970) 37-54.
  13. Terry Eagleton, *Myths of Power: A Marxist Study of the Brontës* (1975; London: Macmillan, 1988) 26. 天野みゆき 『ジョージ・エリオットと言語・イメージ・対話』(南雲堂、2004) 188.
  14. David Cecil, *Early Victorian Novelists: Essays in Revaluation* (1934; London: Constable, 1943) 126.
  15. Sandra M. Gilbert and Susan Gubar, *The Madwoman in the Attic* (1979; New Haven: Yale UP, 1984) 360.